

「十二使徒の名前（一）」

マルコの福音書 3:16~17

はじめに

イエシュアはご自分のもとに十二人の人呼び寄せられ、彼らを使徒として任命されました。前回その十二を意味するヘブル語シェネーム・アーサールには、「神の国に入り、統治者としての權威を神から与えられるイスラエルの民」という意味があることを述べました。今日はこの十二人の使徒たちのそれぞれの名前に焦点を当て、そこに込められた意味を考えてみたいと思います。今日はその第一回目として、ペテロと呼ばれたシモン、そしてゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネを取りあげます。神の選び、そのご計画に偶然とかたまたまということはありません。神は世界の基を据えられる前から、ご自分の民を予め選んでおられたのです（エペソ 1:4）。ですから彼らが選ばれた理由、すなわち彼らに付けられ、聖書に記された使徒たちの名前と、またそれが記された順序に至るまでも神のご計画を指し示す何らかの意味があると考えられます。その意味を探り求め、今日も神の御心、その願いであるご計画に目を留め、その成就と完成を思いめぐらし、待ち望む時とさせていただきます。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:16 こうしてイエスは十二人を任命された。シモンにはペテロという名をつけ、

3:17 ゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた。

1. シモン

十二使徒の筆頭として、まず初めにシモン(שמעון)の名が挙げられています。彼の名は「聞く」という意味の動詞シャーマ(שמע)から派生したものです。これは神を信じる者にとって神の御言葉をシャーマ「聞く」ことが最も重要なことであるということが表されていると考えられます。神はご自分の御言葉に人が耳を傾け、これに聞き従うことを最も喜ばれ、「聞く」ことこそが最高の献げ物、礼拝であると述べられました（サムエル I 15:22）。そしてこのシャーマは本来、その最初の言及である創世記 3:8 から、エデンの園において神の声を「聞く」ということを指し示しています。

【新改訳 2017】 創世記

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

3:9 神である【主】は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

エデンの園において、神は人とその妻、アダムとエバに呼びかけ、彼らはその御声、御言葉を「聞いた」という出来事を、聖書で最初のシャーマは指し示しています。アダムとエバは罪を犯したために神

の御顔を避けてしまいました。神はその罪を赦し、エデンの園における神と人との交わり、関係を再び回復されようとしておられるのです。十二使徒の最初にこのシモンの名が記されたことには、神が何よりも人との交わりを求めておられる御方であることが表されていると考えられます。美しい調和のとれた自然環境を再構築し、豪華な神殿や街を建てることその目的ではなく、ただその御声を「聞く」者の存在を、何よりも求めておられるのではないのでしょうか。同様にイエシュアもまたベタニアの姉妹マルタとマリアの出来事（ルカ 10:38～42）において、御言葉を「聞く」ことが最も必要な第一のことであると述べておられます。私たちの教会の礼拝も聖書の御言葉を聞くことに最も多くの時間を費やしています。これは聖書的であり、神の御心にかかったことであると信じます。これまでもそうであったように、これからますますそのような教会でありたいと願わされます。

2. ペテロ

そしてイエシュアはこのシモンには特別にペテロという名をお与えになりました。これはギリシャ語で「岩」という意味なのですが、ヘブル語ではこれをケーフ(קֵיף)と言います（ヨハネ 1:42 ではケファと訳されています）。この言葉は旧約聖書ではヨブ記 30:6 とエレミヤ書 4:29 の 2 回しか使われていませんので、どちらも見ておきたいと思います。

【新改訳 2017】ヨブ記

30:4 彼らは陸ひじきや藪の葉を摘み、えにしだの根を食物とする。

30:5 世間からは追い出され、人々は盗人に叫ぶように、彼らに大声で叫ぶ。

30:6 谷の斜面や、土の穴、岩の穴に住み、

30:7 藪の中でいなき、いらくさの下に群がる。

30:8 彼らは愚か者の子たち、名もない者の子たち、国からむちでたたき出された者たちだ。

ここで「岩の穴」と訳されている箇所にはケーフが使われています。それは蔑まれ、忌み嫌われ、国から追い出された者たちの住む所を指し示しています。

【新改訳 2017】エレミヤ書

4:27 まことに、【主】はこう言われる。「全地は荒れ果てる。ただし、わたしは滅ぼし尽くしはしない。

4:28 このため地は喪に服し、上の天は暗くなる。わたしが語り、企てたからだ。わたしは悔いず、やめることもしない。」

4:29 騎兵と射手の雄叫びに、町中の人々は逃げ去り、草むらに入り、岩によじ登った。すべての町が捨てられ、そこに住む人はいない。

この箇所は神から離れ、偶像礼拝の罪を犯したイスラエルの民に対する神の裁きの預言の一節です。神は異邦人の「騎兵と射手」を攻め込ませ、民を町から追い出し「岩によじ登」らせるとあり、ここにケーフが使われています。このように、どちらのケーフも自分たちの町、国から追い出される、たたき出

される者たちが行き着く場所として使われています。シモンという名に指し示された、神と交わる存在でありながら、ペテロすなわちケーフという名に示された、虐げられ、国を追われる者たちとは、やはりこれはイスラエルの民、ユダヤ人たちを指し示していると考えられます。つまりシモン・ペテロという存在には、神の選びと、そしてそれを拒んだために苦しむイスラエルの民の姿が表されていると考えられます。

3. ヤコブ

シモン・ペテロに続いて記されているのがこのヤコブ(יַעֲקֹב)です。「足のかかと」を意味するアーケーヴ(אָקֵב)という名詞がその由来です。

【新改訳 2017】創世記

3:14 神である【主】は蛇に言われた。「おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりもろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。

3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」

これはエデンの園においてエバを騙し、人に罪を犯させた蛇、すなわちサタンに対して語られた御言葉です。神はサタンの「頭を打ち」砕く「女の子孫」の存在を挙げられ、サタンはその「女の子孫」の「かかとを打つ」という箇所にも聖書で最初のアーケーヴが使われています。この出来事は神がサタンの前に「敵意」を置かれたゆえに起こるものです。ですからアーケーヴとは本来、サタンに敵意を持たれ、サタンに打たれること、またその存在を指し示していると考えられます。そしてこのアーケーヴと同じ綴りである、「だます、押しつける」という意味の動詞アーカヴ(אָקֵב)にも目を留めてみますと、そこには父を騙し、その長子の祝福を兄から奪い取るヤコブの姿があります。

【新改訳 2017】創世記

27:35 父は言った。「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえへの祝福を奪い取ってしまった。」

27:36 エサウは言った。「あいつの名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけて。私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った。」

アブラハムの子イサクの子ヤコブは、兄のエサウをアーカヴ「押しつけて」、エサウの「長子の権利を奪い取り」、父イサクからの「祝福を奪い取った」ことが記されています。これが聖書で最初のアーカヴが示す出来事であり、この言葉の持つ本来の意味であると考えられます。またここで「奪い取り」「奪い取った」と訳されているヘブル語の動詞ラーカハ(לָקַח)は本来、創世記 2:15 において神がエデンの園に人を置くために「連れて来た」ことを意味する言葉で、「神の国、御国」に入り、そこに住まう権利を得た人を指し示す言葉であると考えられ、それがアーカヴすなわち「押しつける」者であるヤコブであることがここに示されていると考えられます。そして神はこのヤコブのことをこう呼ばれました。

【新改訳 2017】創世記

35:10 神は彼に仰せられた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルが、あなたの名となるからだ。」こうして神は彼の名をイスラエルと呼ばれた。

このようにヤコブという名は、イスラエルを直接的に指し示すものであると言えます。神は確かにこのイスラエルの子孫をお選びになり、この民を用いてご計画を成し遂げようとしておられます。悪魔とも呼ばれるサタンはイスラエル、ユダヤ人とも呼ばれるこの民との間に置かれた「敵意」のゆえに、何度も何度もこれを迫害、攻撃し、絶滅、根絶やしにしようと試み、今日もなおその状態にあります。しかし述べたように、たとえサタンであったとしても神の選び、ご計画を妨げたり、覆したりすることはできないのです。

4. ヤコブの兄弟ヨハネ

そしてイスラエルを直接的に指し示すヤコブ、これに結びつくようにして「ヤコブの兄弟ヨハネ」の名が続いて記されています。ヨハネ(יְהוֹנָתָן)という名には、「恵む、あわれむ」という意味の動詞ハーナン(יָנַן)が使われています。この最初の言及は創世記 33:5 です。

【新改訳 2017】創世記

33:1 ヤコブが目を上げて見ると、見よ、エサウがやって来た。四百人の者が一緒であった。そこで、ヤコブは子どもたちを、レアとラケルと二人の女奴隷の群れに分け、
33:2 女奴隷たちとその子どもたちを先頭に、レアとその子どもたちをその後、ラケルとヨセフを最後に置いた。
33:3 ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。
33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。
33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これはヤコブすなわちイスラエルが、故郷であるカナンの地に還り、そこで兄エサウと再会する場面です。ここでヤコブはエサウに自分の妻と子、女奴隷を紹介し、これを「神が…恵んでくださった子どもたち」と呼んでいます。ここに聖書で最初のハーナンが使われています。ですからハーナンには本来、イスラエルの子孫およびそれに繋がる者たちの存在が指し示されていると考えられます。女奴隷たちはもちろんのこと妻であるレアもラケルも、もともとはアブラハムの子孫ではありませんでしたので神の目から見れば異邦人でした。しかしイスラエルに結びつくことで同じ一つの民に加えられたのです。このように「ヤコブの兄弟ヨハネ」という名にはイスラエルに結びつき、同胞、同族となった異邦人の、教会が指し示されていると考えられます。私たち教会はよく神を「恵みとあわれみに満ちた御方」というような呼び方をしますが、その恵みとあわれみとは、具体的にはこのハーナンが本来指し示している出来事、すなわち異邦人の教会が、イスラエルの民に加えられることを指し示しているのです。

5. ゼベダイの子

そして使徒ヤコブとその兄弟ヨハネとは「ゼベダイの子」であることが明記されています。ゼベダイ(זְבַדַּי)は「授ける」という意味の動詞ザーヴァド(זָבַד)を由来とする名であると考えられます。この最初の言及は創世記 30:20 です。

【新改訳 2017】創世記

30:19 レアはまた身ごもって、ヤコブに六番目の男の子を産んだ。

30:20 レアは言った。「神は私に良い賜物を下さった。今度こそ夫は私を尊ぶでしょう。彼に六人の子を産んだのですから。」そしてその子をゼブルンと名づけた。

ヤコブすなわちイスラエルの妻レアが、彼に「六番目の男の子を産んだ」時、彼女が「神は私に良い賜物を下さった」と言った箇所に、聖書で最初のザーヴァドがあります。そしてレアは「今度こそ夫は私を尊ぶでしょう」と言い、「尊ぶ」という意味の動詞ザーヴァル(זָבַל)から、その子にゼブルン(זְבוּלוֹן)という名をつけたと考えられますが、このゼブルンという名の綴りをよく見てみますと、そこには「神の住まれる高き家」という意味のゼヴール(זְבוּר)という名詞が綴られていることがわかります。列王記 I 8:13 でイスラエルの王ソロモンが神殿を建て終えた際の祈りの中でこの言葉を使っています。ですから、神がザーヴァド「良い賜物を下さ」ることとは、神の住まいが与えられること、すなわち神ご自身が人の中に住まいを設け、人とともに住んでくださることである、ということがこの「ゼベダイ」という名には表されていると考えられ、「ゼベダイの子ヤコブと、ヤコブの兄弟ヨハネ」という名には、神の住まれる家である神殿と選びの民であるイスラエル、そしてその同胞として加えられる異邦人の教会の姿が表されていると考えられます。

6. 雷の子

そしてイエシュアはこのヤコブとヨハネという兄弟に「ボアネルゲ、すなわち、雷の子」という名をつけられたことが記されています。ボアネルゲ(Boavnergés)というのはギリシャ語ですが、その原語の由来について、実はよく分かっていないそうです。しかしそれは「雷の子」という意味であることだけははっきりしていますのでこれに目を留めてみたいと思います。ヘブル語で「雷」のことをラーム(רָאָם)と言い、「鳴りとどろく、あわてふためく」という意味の動詞ラーアム(רָאָם)がその語源であると考えられます。この最初の言及はサムエル記 I 1:6 です。

【新改訳 2017】I サムエル記

1:2 エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといった。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。

1:6 …彼女に敵対するペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。

これは預言者サムエルの母ハンナについての出来事ですが、彼女はエルカナという人の妻でありながらサムエルが生まれるまで長い間不妊の女でした。当時子を産めない女性はその家の恥、また呪いとさえ言われていました。そこでもう一人の妻ペニンナはハンナを家族と認めるところか敵対視して彼女を悩ませ、苦しみ「**怒りをかき立て**」させたとあり、ここに聖書で最初のラーアムがあります。ですからラーアムとは本来、敵に悩まされ、苦しめられる者の姿を表していると考えられます。

ヤコブとその兄弟ヨハネとは、イスラエル民とそれに加えられる異邦人の教会を指し示していることを述べました。イスラエルと同様、教会の歴史もまた迫害と患難の歴史です。敵であるサタンはこの教会も滅ぼしてしまおうと今日も働いています。私たちの日本でも「禁教令」という法の下に凄まじい数のクリスチャンが処刑され、また国を追われました。日本の殉教者数は20万人にもおよぶと伝えられ、この数はローマ帝国の時代に行われたクリスチャンに対する大迫害による殉教者数に次ぐと言われています。信仰の自由が許された今日においても、日本のクリスチャン人口は全体のわずか1%にも満たない状況です。しかもそのクリスチャンのほとんどが、御言葉に対する理解も乏しく、何とか信仰を維持しているというような状態です。これらはすべて敵であるサタンと悪霊の働きによるものです。サタンはかつてエバを騙したように、その偽りの言葉によって聖書の御言葉の意味を捻じ曲げ、隠し、イスラエルと教会を互いに憎み合わせ、迫害と誘惑によって弱らせ、滅ぼそうとしています。このように、「雷の子」とは、イスラエルと教会が、敵であるサタンに悩まされ、苦しめられるようになることを指し示して付けられた名であると考えられます。

7. 実現

シモンに与えられた「**ペテロ**」、ヤコブとヨハネに与えられた「**ボアネルゲ**」、この二つの名はともに神に選ばれた者であるがゆえに受ける悩み、苦しみ、痛みを表していると言え、イスラエルと教会がそのような歩みをする事が示されています。しかしその前に、神はシモンの名によってエデンの園に表された神と人との交わりの回復を示し、その交わりの中にヤコブとヨハネの名によって示されたイスラエルと教会が入られることを示し、そしてゼバダイの名の中に、それが神の家、神の国であることを示しておられ、私たちの受ける苦しみ、失望に終わるものではないことを示しておられると考えられます。イスラエルと教会が受けてきた、またこれからも受けることが聖書に定められた悩み、苦しみ、痛みが事実なら、同様に約束された神の国についてのご計画もまた必ず実現すると言えます。聖書に記された、指し示された神のご計画はすべて実現するのです。私たちはますますこの必ず実現する神のご計画に目を留めてまいりましょう。聖霊の助けがありますように。